

聖書:エレミヤ書1章11~19節

説教:あなたは何を見ているのか

はじめに

引き続きエレミヤ書を見てまいります。イスラエルが北と南に分裂してそれぞれ別々の道をたどり、やがて北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ、捕囚の民となって外国に連れて行かれてしまいました。そのような大きな出来事からおよそ100年経って、エレミヤが主に召し出されて預言者として立つことになったと前回話しました。南ユダ王国の人々は、かつての同胞であった北イスラエル王国が外国の軍隊に攻められていくのを平気で眺めていたはずはありません。あれは神のさばきではないのか。自分たちは大丈夫なのか。自分たちも罪から立ち返らなければ同じ運命をたどるのではないのか。もしそこで神の前に振り返ることができていたなら、エレミヤが預言者として立つことはなかったでしょう。しかし、南ユダ王国の人々は、神に背き続けて悔い改めようとしません。そのような人々に、神はエレミヤを通してどのようなことを伝えようとしたのか。私たちはこのことばを今どのように聞くべきなのか、ともに考えてまいります。

1 何を見ているのか

1) 「アーモンドの枝」

11、12節。「主のことばが私にあった。『エレミヤ、あなたは何を見ているのか。』私は言った。『アーモンドの枝を見えています。』すると主は私に言われた。『あなたの見たとおりの。わたしは、わたしのことばを実現しようと見張っている。』」

このやりとりは少し説明が必要です。みなさんの聖書の「アーモンド」ということばと「見張っている」というところに米印がついていて欄外に説明があります。ヘブル語で「アーモンド」が「シャケデ」、同じく「見張る」が「ショケデ」と発音します。おわかりのとおり、これは掛詞、あるいは我藤兄が得意な駄じゃれです。神は駄じゃれを使うと言うとびっくりするかもしれませんが、もちろん遊んでいるのではなくて神は掛詞という方法を使ってエレミヤに大切な真理を教えようとしている。それはどんなことだったのか。その前にもう一つのやりとりがありますので、そこを見ておきましょう。

2) 「煮え立った釜」

13、14節。「再び主のことばが私にあった。『あなたは何を見ているのか。』私は言った。『煮え立った釜を見えています。それは北からこちらに傾いています。』すると主は私に言われた。『わがわがが北から、この地の全住民の上に降りかかる。』」

今度は掛詞ではなくて、エレミヤが見ているもの、煮え立つ釜が北の方角から傾いていて、今にも吹きこぼれそうになっている。それをたとえとして使って、ユダ王国がやがて北からの軍隊によって攻め滅ぼされていくのだと教えます。

まとめると、エレミヤに「何を見ているのか」と二度問いかけながら、神は南ユダ王国の人々にわがわがが必ず起こるよう見張っていると言っているのです。

3) 全住民の悪に対して

なぜ神は南王国にわがわがいを起こそうとされるのか。もちろん理由があります。16節。「わたしは、この地の全住民の悪に対してことごとくさばきを下す。彼らがわたしを捨てて、ほかの神々に犠牲を供え、自分の手で造った物を拝んだからだ。」

この世界を造られた唯一の神を捨て、ほかの神々を拝んで悪を行ったので、わがわがいを与える。世の人たちがこれを聞いたなら、おそらくこんなふう言うでしょう。「キリスト教の神はなんて心が狭いのだろう。どんな神でもよいではないか。その人がよいと思った神を拝んでなぜ悪いのか。こんな偏屈なことを言うから、宗教と宗教がぶつかって戦争が起きるのだ。その点、日本は宗教に寛容で神と仏が仲良く共存してきた。」

一見魅力的な意見ですが、日本が本当にどんな神で受け入れる寛容な国であったかは、歴史を学べばすぐに分かります。つい七十九年前まで、日本では天皇は神であると教えられ、昔はどこの家に行っても鴨居の上に天皇の写真が飾ってあって、皆を拝んでいました。そんななかで天皇は神ではないと言おうものなら徹底的に弾圧し、キリスト教会はそのことで大変苦しんだ。

世の人たちは言うでしょう。「もちろん過去には行き過ぎたところもあったかもしれない。でも

聖書が、ほかの神々を拝むことをこんなに厳しく禁じる理由が納得できない。」

なぜ神はわざわざエレミヤを召し出すようなことまでして、厳しいことを語ろうとしたのか。そこをもう少し突き詰めたと思います。

2 罪と救い

1) ほかの神々

南ユダ王国の人々が拝んでいた、ほかの神々とはどんなものであったのか。そこから見ていくのがわかりやすいでしょう。それらの神々と聖書の神の違いを比べてみましょう。

2章27, 28節にこうあります。「彼らは木に向かって「あなたは私の父」、石に向かって「あなたは私を生んだ」と言っている。実に、彼らはわたしに背を向け、顔を向けない。それなのに、わざわいのときには「立って、私たちを救ってください」と言う。では、あなたが造った神々はどこにいるのか。あなたのわざわいのときには彼らが立って救えばよい。ユダよ、あなたの神々はあなたの町の数ほどもあるではないか。」

痛烈な皮肉です。「木に向かって」とか「石に向かって」というのは、木や石を刻んだ神のこと。それらはわざわいからあなた方を救うことができないというのです。木や石を拝んでいる人たちはどう思っているのでしょうか。

八月に、岩手の実家で法要があるからというので私も行くことになり、親戚一同がお寺に集まりました。お寺のお堂の中にはたくさんの仏像があつて、皆が手を合わせながら「ありがたい」と言って拝む。それを見ながら考えるわけです。この木で彫られた仏像は、私たちを救えるのだろうか。

一つの例を挙げます。久しぶりに集まった親戚同士、会えなかった間の話題で花が咲きました。そこで私は、数年前に高速道路で車が急停止して大変な目にあったけれど、怪我一つなく無事だったことを話したのです。そうするとある親戚がこう言った。「和男ちゃんはおばあちゃんにかわいがられていたから、きつとおばあちゃんが守ってくれたのよ。」これを聞いたときはうなづいてしまいました。この親戚が何か変なものを信じているわけではなくて、世の人たちのごく一般的な考え方を代表していると言っていいでしょう。死んだ人が神となって霊的な力を帯びようになり、生きている者たちを救うことができると、ぼんやりと信じている。

2) 聖書の神

聖書の神と比べます。聖書の神も私たちを救ってくださいと言います。問題となるのは、同じ「救い」ということばを使っているけれど、いったいなにかから救われるのかです。死んだおばあちゃんが、事故のときに守ってくれた。言い換えれば、先祖の霊は、私たちを事故や災害、病気、わざわいから救ってくれるということです。

では聖書の神は何から私たちを救うのか。マタイの福音書1章21節。「マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」事故や災害、病気とは書いていなくて、罪から救うと書いてある。では罪とは何か。例としてモーセの十戒の六番目を取り上げましょう。「殺してはならない。」私は人を殺したことがないので罪人ではない。そんな言い逃れはできません。肉体的に傷つけることだけを行っているのではない。心の中で相手を憎みのろったことがあるなら、あなたは立派な殺人者なのだ。罪を犯したことになると言われてしまう。それほど厳しい戒めです。生まれてから今まで一度として、私はだれも憎んだことはない。そんな人がいるのでしょうか。だれもいないでしょう。ということはみな罪人だということになる。口には出さなくても、多くの人がそれで苦しんでいる。聖書の神は、イエス・キリストの十字架を信じるならば、だれでも罪から救われるのだと言ってくださる。だから聖書は私たちの希望です。

世の人たちが信じている神々と比べてください。たとえば先祖様に霊的な力があつたとしても、そもそも罪からの救いということなど関心がなくて、とにかく事故や災害病気から守られることしか考えません。喉元過ぎれば熱さ忘れると言いますが、困ったときだけ助けてもらえればよいという考え方です。南ユダ王国の人々もこれとほとんど同じ。罪からの救いがなければ、永遠のいのちもありません。

神がエレミヤをなぜわざわざ召し出したのか。そのことを私たちに伝えたいからです。あなたがたがた拝んでいる神はあなたがを救うことはできない。もしそのままにいるなら、あなたがたは永遠のいのちを失うことになる。そうであつたはならない。絶対にいのちを失ってはならない。だから、あなたを罪から救い解放し、永遠のいのちを与えてくださる神に立ち返りなさい。

エレミヤを召し出した神の熱心は、やがてイエス・キリストにつながっていきます。神のひとり子

である方が自ら私たちの身代わりとなった十字架、その十字架にこそ、神がどれほどに私たちを愛し、罪から救いたいと願っておられるのか、すべてが示されています。

3 何を見ているのか

1) 肉の目と霊の目

神がエレミヤを召し出した目的はわかりました。最後に、神がエレミヤにわざわざ「あなたは何を見ているのか」と問いかけたことの意味を考えます。と言いますのも、そんな問いかけなどせずすぐに、「わざわいは北から、この地の全住民の上に降りかかる」と言えば済むことですから、何か訳がありそうです。

考えてみるとエレミヤへの問いかけは、今も私たちに同じように問いかけられているのではないか。私たちの肉の目には、私たちを誘惑してくるものが沢山見えます。そこに幸せがあるかもしれないと思ったりもする。しかし私たちにはもう一つの目も与えられていることを忘れてはならない。それが霊の目です。「あなたは何を見ているのか」と問われたとき、エリヤはたまたまアーモンドの枝を見ていたというのではない。主が「あなたの見たとおりに」とエレミヤを高く評価しました。それはエレミヤが霊的な目によって大切なことを見分ける視力が備えられていて、その目で物事を常に見ていたことを表しています。預言者として召し出される者には、そのような目が要求されるのです。

2) 霊の目で見ると

牧師もある意味では預言者的な役割を担っています。ですから私自身も、霊的な目を持っているかどうかを常に自分に問いかけてきました。意外に思うかもしれませんが、牧師だから大丈夫ということではない。残念なことです。霊的に見分ける目がなかったばかりに教会に異教の教えが入り込んで、まるで狼のように食い荒らされていく、そういうケースを見てきました。

いつか後任の牧師候補がここに立つことになります。その方が霊的な視力をもっているかどうか。神が召された者であるなら、必ずきちんとした視力と判断力を備えてくださっているはず。そのこともみなさんの目でチェックしていただきたい。

世の光、地の塩として、私たち自身も霊的な識別力があるのかどうか問われながら、世の人々の目に見えていない十字架の救いを伝えていく者でありたいと願います。